

# 量的と質的と統計的と

寺田寅彦

青空文庫



古代ギリシアの哲学者の自然観照ならびに考察の方法とその結果には往々現代の物理学者、化学者のそれと、少なくとも範疇的はんちゆうてきには同様なものがあつた。特にルクレチウスによつて後世に伝えられたエピキュリアン派の所説中には、そういうものが数え切れないほどにあるようである。おそらくこれらの所説も、全部がロイキツポスやデモクリトスなどが創成したものでなくて、もつともつと古い昔からおぼろげな形で伝わり進化したものに根を引いているのであろうと想像される。しかしこれら哲学者の植え付けた種子が長い中世の冬眠期の後に、急に復興して現代科学の若葉を出し始めたのは、もちろん一般的时代精神の発現の一つの相には相違ない。しかし復興期の学者と古代ギリシアの学者との本質的な相違は、後者特にアテンの学派が「実験」を賤いやしい業わざとして手を触れなかつたのに反して、前者がそういう偏見を脱却して、ほんとうの意味のエキスペリメントを始めた点にあると思われる。ガリレー、トリツエリ、ヴィヴィアニ、オットー・フォン・ゲーリケ、フック、ボイルなどといったような人がはなはだ粗末な今から見れば子供のおもちやのような道具を使つて、それで生きた天然と格闘して、しかして驚くべき重大な画期的実験を矢継ぎばやに行なつたのがそもその始まりである。

この歴史的事実は往々、「質的研究が量的の研究に変わったために、そこで始めてほんとうの科学が初まった」というお題目のような命題の前提として引用される。これは、この言葉の意味の解釈次第ではまさにそのとおりであるが、しかしこういう簡単な、わずか一二行の文句で表わされた事はとかく誤解され誤伝されるものである。いったいにこの種類の誤伝と誤解の結果は往々不幸にして有害なる影響を科学自身の進展に及ぼす事がある。それはその命題がポピュラーでそうして伝統的權威の高圧をきかせうる場合において特にはなほだしいのである。

量的というだけならば古代民族の天文学的測定はなほだ量的なものであった。しかし彼らは実験はあまりしなかった。上記の科学の黎明期れいめいきにおけるこれら実験の中のあるものはいくらか量的と言われうるものであったが、しかしこれらのすべては必ずしも今ごろ言うような量的ではなかったのである。この時代として最重要であったことは、「卵大」のガラス球についた「藁わらぐらいの大きさの」管を水中に入れて「あたためると」ぶくぶく「泡あわが出」、冷やすと水が管中に「上る」ことであつた。また、銅球の中の水を強く吸い出すと急に高い音を立てて球がひしげたりした「こと」であつた。あるいはむしろこういう「実験」を試してみようと思ひ立つたこと、それを実行した事であつた。水が上ることが

知られさえすればそれが何寸上ったかを計りたくなり、ポンプを引くのひどく力がいればそれが何人力だか計りたくなり、そうしてそれを計る事ならばだれにでもできるのである。

ガリレー、ゲーリケ以後今日まで同様なことがずっと続いて跡を絶たない。ヴォルタの電盆や電堆<sup>でんたい</sup>、ガルバニの細君の発見と言われる蛙<sup>かえる</sup>の実験いずれも質的なる画期的実験である。オエルステットが有名な実験をした時の彼自身の考えは質的にさえ勘違いしていた。ルムフォードの有名な実験は「水が沸きさえもした」事に要点があった。ロバート・マイヤーがフラスコの水を打ち振った後にジヨリーの室<sup>へや</sup>へ駆け込んで「Es ischt so !」と叫んだのは水が「あたたまった」ためで、それが何度点何々上ったためではなかつたのである。ロエンチエン線の発見が学界を驚かしたのはその波長が幾オングストロームあつたためではなく、そういうものが「在<sup>あ</sup>る」ということであつた。ベクレル線も同様であつた。シー・ティー・アール・ウィルソンの膨張箱の実験が画期的であつたゆえんはまず何よりも粒子の实在を質的に実証した点であつた。ラウエ、菊池<sup>きくち</sup>の実験といえども、まず第一着に本質的に何よりもだいなことは「写真板の上にあのような点模様<sup>さくち</sup>が現われる」ことであつた。それが現われた上での量的討究の必要と結果の意義の大切なことはもとより言うま

でもないことであるが、第一義たる質的発見は一度、しかしてただ一度選ばれたる人によつてのみなされる。質的に間違つた仮定の上に量的には正しい考究をいくら積み上げてても科学の進歩には反古紙ほごがみしか貢献しないが、質的に新しいものの把握はあくは量的に誤つていても科学の歩みに一大飛躍を与えるのである。ダイヤモンドを掘り出せば加工はあとから出来るが、ガラスはみがいても宝石にはならないのである。

現代のように量的に進歩した物理化学界で、昔のような質的発見はもはやあり得まいという人があるとすれば、それはあまり人間を高く買い過ぎ、自然を安く踏み過ぎる人であり、そうしてあまりに歴史的事実を無視する人であり、約言すれば科学自身の精神を無視する人でなければならぬ。

重大な発見の中でいわゆる Residual phenomena の研究から生まれるものがある。これらはもちろん非常に精密なる最高級の量的実験の結果としてのみ得られるものである。たとえばあまりに有名なルヴェリエの海王星における、レーリーのアルゴンにおけるごときものである。また近ごろの宇宙線 (Cosmic ray) のごときものもそうである。これらの発見の重大な意義はと言えば、それらのものの精密なる数値的決定より先にそれらのものが「在るあ」ということを確認することである。もつともそのためには精密な計画と行き届い

た考察なしには手を出せないことは言うまでもないことであるが、その際得る数字の最高精度は少なくとも最初には必ずしも問題にならないのである。おもしろいことにはこの種の Residual effect reshi bu zo「残見」されるよりずっと前から多くの人の二つの開いた目の前にちやんと現在して目に触れていても、それが「在る」という質的事実を掘り出し、しっかりと把握するまでにはなかなか長い時を待たなければならぬのである。これは ひつきょう 畢竟量を見るに急なために質を見る目がくらむのであり、ざこ 雑魚を数えて どんしゅう 呑舟の魚を取りのがすのである。またおもしろいことには、物理学上における画期的の理論でも、ほとんど皆その出発点は質的な「思いつき」である。近代の相対性理論にしても、量子力学にしても、波動力学にしても基礎に横たわるものはほとんど哲学的、あるいは質的なる物理的考察である。これなしにはいかなる数学の利器をいかに駆使しても結局何物も得られないことは、むしろ初めからわかったことではなければならない。実際これらの理論の提出された当初の論文の形はある意味においてはほとんど質的のものである。それが量的に一部は確定され一部は修正されるのにはやはりかなり長い月日を要するのである。

もちろん質的の思いつきだけでは何にもならないことは自明的であるが、またこれなしには何も生まれないこともより多く自明的である。西洋の学界ではこの思いつきを非常に

尊重して愛護し、保有し、また他人の思いつきを尊重する学者が多いのであるが、わが国ではその傾向が少ないようである。「ただの思いつきである」という批評は多く非難の意味をもって使われるようである。思いつきはやはり愛護し助長させるべきであろう。

これらはきわめて平凡なことである。それにかかわらずここでわざわざこういうことを事新しく述べ立てるのは、現時の世界の物理学界において「すべてを量的に」という合い言葉が往々はなはだしく誤解されて行なわれるためにすべての質的なる研究が *encourage* される代わりに無批評無条件に *discourage* せられ、また一方では量的に正しくしかし質的にはあまりに著しい価値のないようなものが過大に尊重されるような傾向が、いつでもどこでもというわけでないが、おりおりはどこどこに見られはしないかと疑うからである。そのために、物理的に見ていかにおもしろいものであり、またそれを追求すれば次第に量的の取り扱いを加えうる見込みがあり、そうした後に多くの良果を結ぶ見込みのありそうなものであっても、それが単に現在の形において質的であることの「罪」のために省みられず、あるいはかえって忌避されるようなことがありはしないか、こういうことを反省してみる必要はありはしないか。

むしろそういう研究を奨励することが学問の行き詰まりを防ぐ上に有効でありはしない

か。

もちろん多くの優秀なる学徒たちは何もわざわざそういう質的の、容易なようで実はむずかしい実験などをやらなくても、立派に量的であつて、しかもおもしろくて有益であるような研究に従事するほうが賢明であり能率が良いと考えるであろうし、またそれはまさにそのとおりである。それだけならば何も問題はないのであるが、しかしもしそういう人たちがかりにそういう人たちとは反対にわざわざ難儀で要領を得ない質的研究をしている少数な人たちの仕事を、意識的、ないしは無意識的に discourage しあるいは積極的に阻止するようなことが、たまにならばともかく、学界一般の風<sup>ふう</sup>をなすようなことがあつたとすればどうか、そういう事が実際にあるかないか。これも一応反省してみなければならぬ。現代において行なわれておりあるいは行なわれうべき質的研究は必ずしも初めから有益でありおもしろいとは限らない。十中八九は実際おそらくなんらの目立つた果実を結ぶことなく歴史の闇<sup>やみ</sup>に葬られるかもしれない。しかしそういうものはいくらあつても、決して科学の進歩を阻害する心配はないのである。科学という靈妙な有機体は自分に不用なものを自然に清算し排<sup>はい</sup>泄<sup>せつ</sup>して、ただ有用なるもののみを摂取し消化する能力をもっているからである。しかしもしも万一これら質的研究の十中の一から生まれうべき健全なるもの

萌芽<sup>ほつが</sup>が以上に仮想したような学風のあらしに吹きちぎられてしまうような事があり、あるいは少しの培養を与えさえすればものになるべきものを水をやらないために枯死させてしまうようなことがあつたとしたら、それはともかくも科学の進歩をたとえ一時であつても、遅滞させるというだけの悪い効果はあるであろう。そういう事が現代にあるかないかを考慮してみる必要はないであろうか。まさかそれほどのことはないとしても、それに似た傾向はありはしないかを考えてみるほうがよくはないか。

ずっと昔から質的にしか知られていないような現象の研究には通例異常な困難が伴なう。結局の目的はやはりこれらを量的分析にかけるにあるが、現象のいかなる相貌<sup>そうぼう</sup>をつかまえてこれにそのような分析を加えるべきかの手掛かりを得るに苦しむのが常である。それが困難であればこそ従来の自然探究者から選み残され継子<sup>まご</sup>扱いにされて昔のままにわれわれの眼前にそのだらしない姿を横たえているのである。しかし一方ではまた、だれもそういう現象の量的の取り扱いが不可能だということの証明をした人もないのである。「永久運動」や「角の三等分」の問題とはおのずからちがつた範疇<sup>はんちゆう</sup>に属するものであることは明らかであると思われる。

こういう種類の問題の一例は、おなじみのリヒテンベルクの放電像のそれである。この

人が今から百何十年前にこの像を得た時にはたぶん当時の学者の目を驚かせたに相違ないのであるが、それがその後の長い年月の間にただきんしょう僅せんしょう少な物好きなきな学者たちの手で幾度となく繰り返し返され、少しずつ量的分析へのおぼつかない歩みをはこんでいただけであつた。やつと近年になつてこの現象が電気動力線の瞬時的な高圧の測定に利用されそうだというので若干のエンジニアによつて応用の方面の見地から取り扱われはしたが、それも本質的に物理的な意味ではなんらの果実を結ぶこともなしに終わつていように見える。そうしてこの現象の物理的本性についてはもちろんいろいろの解説もあり、ある程度までは説明されたと信ぜられているのであるが、現在までのところではただ従来他の方面でよく知られた事実を適用して、それだけで説明し得られる限りの問題だけに触れてはいるが、あの不思議な現象のもつと本質的な根本問題については、あえて試みにでも解析のメスを下そうとすることがまれであるのみならず、その問題の存在とその諸相を指摘しようとする人もないように見えるのである。今日でもまだ奇妙でつまらぬものごとを「リヒテンベルクのような」といふ言葉で言い現わす人さえあるようである。これももつともなことである。

こういう種類の現象は分類的に見るとたいいてい事がらが偶然的に統計的であつて、古典

的物理学の意味において deterministic でないような部類に属しているのである。

統計的数字を取り扱うことが「量的」であるかないか、従来の古典物理学で言うところの量的であるかないか、これは議論にもならないような事であるが、しかし事実上往々、たとえば地球物理学の問題における統計的研究は物理学上の量的研究とは全然別種のものとなされ、どうかするとそれがかなり有益であり興味あるものであっても、「統計的だから」というわけをもつて物理的なるものの圏外に置かれ、そういう仕事を行なう人たちには「統計屋」なるあまり愉快でない名前がさづけられる場合もあつた。実際多くは統計屋であつたかも知れはわからない。しかしそういう事実からして、統計的研究——物理学方法論から見た一つの方法としての——が本質的に無価値なるがごとき「感じ」を与えるようになるとしたら、それもまた憂うべきことである。

近代物理学では実際統計的現象の領土は次第次第に拡張されて来た。そうして古い意味での deterministic な考え方は一つのかりの方便としてしか意味をもたなくなつて来た。同じ原因は同じ結果を生ずるといふ命題は、「同じ」といふ概念の上におおいかかつた黒雲のために焦点をはずれた写真のように漠然<sup>ぼくぜん</sup>たる言詞となつて来た。このような、これに関連したあらゆる物理学概念の根本的な革命は Reproducibility という概念にも根本的な革

命をもたらしただよに見える。今まではなるべくなら避けたく思った統計的不定の渾沌こんとんの闇やみの中に、統計的にのみ再現的な事実と方則とを求めようと余儀なくされたのである。しかもそういう場合の問題の解析に必要な利器はまだきわめて不備であつて、まさにこれから始めて製造に取りかかるべきである。このような利器のあるものはすでに偉大な現代学者の手で創成されたとは言え、これですべてが終わったとはどうしても考えられないようである。

こういう時代において、それ自身だけに任せておくとかく立ち枯れになりやすい理論に生命の水をそそぎ、行き詰まりになりやすい抽象に新しい疎通孔をあけるには、やはりいろいろの実験が望ましい。それには行ない古したことの精査もよいが、また別に何かしら従来とはよほどちがつた方面をちがつた目で見るような実験的研究が望ましい。ことにこの眼前の生きた自然における現実の統計的物理現象の実証的研究によつて、およそ自然界にいかにも多様な統計的現象がいかなる形において統計的に起こっているかを、できるならば片端から虱しらみつぶしに調べて行つて、そうしてそれらの現象の中に共通なる何物かを求めることが望ましく思われる。そういう共通なものがはたしてあるかという疑いに対しては、従来の物理学から見てまるで異なる方面の現象と思われるものの中に、少なくとも一

ormalな肖似の著しいもののあることは多くの人の認めるところであろう。少なくとも肖似しているとは多数の人に思わせるような何物かがあることだけは確かである。この何物かは何であるか。それを説明すべき方則はまだ何人も知らないのである。しかしともかくも何かしら一種の方則なしに、どうしていったいそういう事が起こりうるであろうか。

この難儀の問題の黒幕の背後に控えているものは、われわれのこの自然に起こる自然現象を支配する未知の統計的自然方則であつて、それは——もしはなはだしい空想を許さるるならば——熱力学第二方則の統計的解釈に比較さるべき種類のものではあり得ないか。マクスウェル、ボルツマン、アーレニウスらを悩ました宇宙の未来に関するなどを解くべきかぎとしての「第三第四の方則」がそこにもしや隠れているのではないか。

このような可能性への探究の第一歩を進めるための一つの手掛かりは、上記のごとき統計的質的現象の周到なる実験的研究と、その結果の質的整理から量的決算への道程の中に拾い出されはしないであろうか。

要するに、従来のいわゆる統計物理学は物理学の一方の庇ひさしを借りた寄生物であつたのであるが、今ではこの店子たなこに主家おもやを明け渡す時節が到来しつつあるのではないか。ほんとうの新統計的物理学はこれから始まるべきではないか。これはもちろん筆者のはなはだ気違

いじみた空想であるかもしれないが、ともかくも多くの人の少なくとも一応は考慮してもよい事ではないかと思うのである。

最後についてながら私が近ごろ出会ったおもしろい経験をここにしるしておこう。それはある会合の席でプランクトンの調査に関する講演を聞いた時、「今回のわれわれの調査はまだ単に量的であつて質的の点までは進んでいない」という言葉を聞いて愕然<sup>がくぜん</sup>として驚いたのであつた。物理学者にはいつでも最初が質的で次に量的が来るのに、ここではそれが正反対なのである。しかしあとでよく考えてみると、物理でもやはりプランクトンと同様なものを、水産学におけると同様に取り扱っていることは少しも珍しくない。つい近くまでわれわれは鉄の弾性とか磁性とかいうことを平気で言つて、その「鉄」を作る微晶や固溶体のプランクトンの人別調べは略していた。何万ボルトの電撃という一語であらゆるサージの形を包括していた。放電<sup>ほうでん</sup>間隙<sup>かんげき</sup>と電位差と全荷電とが同じならばすべてのスパークは同じとして数えられた。すなわちわれわれはやはり量を先にして質をあとにしていたのであつた。このある日の経験は私に有益であつた。われわれが平生あまりに簡単に質的量的ということを考え過ぎているということを痛切に反省させられたのであつた。

以上未熟な考察の一部をしるして貴重なる本誌の紙面をけがし読者からのとがめを招くであろうことを恐れる。紙数の限りあるために意を尽くさない点の多いのを遺憾とする。

ただ量的にあまりに抽象的な、ややもすれば知識の干物の貯蔵所となる恐れのある学界の  
一隅いちぐうに、時々は永遠に若い母なる自然の息を通わせることの必要を今さららしく強調する  
ためにこんな蕪辞ぶじを連ねたに過ぎないのである。若くてのんきで自由な頭脳を所有する  
学生諸君が暑苦しい研学の道程であまりに濃厚になつたであろうと思われる血液を少しば  
かり薄めるための一杯のソーダ水として、あるいはまたアカデミックな精白米の滋味に食  
い飽きて一種のビタミン欠乏症にかかる恐れのあるときの一さじの米ぬかぐらいのつも  
りでこの一編の所説の中に暗示された何物かを味わってもらわれれば、筆者の望外のしあ  
わせである。

(昭和六年十月、科学)

## 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第三卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年4月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第64刷発行

※底本の誤記等を確認するにあたり、「寺田寅彦全集」（岩波書店）を参照しました。

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2000年10月3日公開

2003年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 量的と質的と統計的と

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>